

「乾瑞丸轟沈」

鉄兵団の惨劇

兵庫県 岸上房雄

私は大正十（一九二一）年四月一日、兵庫県神崎郡神崎町岩屋で生まれました。日本最古の銀山の生野郷の隣村が神崎村であります。貧富の格差激しい時代で、一生懸命に働く精神の両親に育てられ無事に成人できました。

昭和十六（一九四一）年徴兵検査を受け第一乙種合格でした。が甲種合格に編入されました。

昭和十七年一月十日、中部第五十四部隊（姫路輜重兵連隊）へ入営しました。部隊は三個中隊ありました。第一、第二中隊は挽馬中隊で、第三中隊は新設の自動車中隊でした。盛大な見送りを受けて営門に入って身体検査を受け「良し」でした。

この時点において病気が判明した場合は即日帰郷となり、不名誉なことです。親や親戚に申し訳

なしとて自殺したり、行方不明の逃走した者がありました。

入隊当日は教育係下士官から「今日一日は貴様達はお客さん扱いだ。明日からは充分鍛えるから心せよ」でした。

第一中隊の集合教育隊でした。郷土において兵役満期の在郷軍人会の先輩から種々体験談を教えられていましたが、いざ自分の身をもって体験する段になりますと（見ると聞くとは大違い）起床ラッパで飛び起き、一日の行事が目が廻る程大忙でした。

日常の肉体訓練以外に、軍人勅諭に始まり各典範令といって諸事一切が規定、規約、守則にて縛られていました。

自分達の青少年期に村の老人がよく言っていた。軍隊へ入って無事満期を勤めてきたら「一人前の男だ、嫁さんも来るぞ」でした。

^{わなな}たしかに初年兵の労苦を思えば世界中に恐れ戦くものは何一つ無いと言う程、自分は真面目に

一生懸命だった。月間何度と不寝番が当たり、古年兵次兵と組みになっての深夜の勤務、また輜重隊ですら軍馬がいます。この厩当番は大変だった。軍馬は利口な生き物です。自分達のような素人には馬鹿にして前脚で抱きついたり噛みつきや、後脚で蹴られたり馴れるまでが大変だった。

第一期の検閲終了。一泊外出許可にて故郷へ帰りました。いよいよ出動が迫っています。各戦線は拡大してどの方面への出動か一切不明です。皆様に別れを告げて帰営しました。

昭和十七年四月初旬、屯営出発、城南練兵場に各兵科の出陣兵士集結し、護国神社にて武運長久と戦勝祈願の祈りを捧げ、駅前通りを歩武堂々と行進し日章旗を打ち振り「万歳！ 万歳！」の歓呼に送られました。自分の身内・親戚も駅前群衆の中にいました。軽く手を振って一路車上の人となりました。万感胸に迫りました。

下関から関釜連絡船で釜山に渡りました。当時

の朝鮮の鉄道は日本国有鉄道の管轄だったのか、確実に輸送業務が行われていたようでした。

京城（ソウル）の手前から竜山を経て北進し、会寧、羅津を通過して豆満江から満州国へと列車は進みました。早春ですが車外は寒かった。

延吉、寧安、牡丹江、林口、勃利を通過して任地へ。

「佳木斯」へと到着しました。駅頭に整列し各部隊から出迎えた古年兵に誘導されて、それぞれ原隊へ着任しました。自分達は駅前広場から南へ進み、忠霊塔の小山の下を通過して、第九師団司令部の堂々たる赤煉瓦の建造場前を東へ、陸軍病院の東隣りの広場の衛兵所らしき所を歩調を整えて入っていきました。

木造の建物が三つ四つ棟が連なり、その外には煙突が幾十本も林立している。殺風景この上なしという所だった。住めば都とは良く言ったものだ。自分もここに二年余り生活するとは夢にも思いませんでした。

輜重兵第十連隊は朝日兵営と敷島兵営の二個所に別れて兵営があった。朝日兵営は第十師団司令部の南側に背中合わせにあり、甲編成の立派な兵舎です。連隊本部は付属部と第二大隊本部（自動車）第四、第五、第六と三個中隊、輓馬中隊は第一中隊（西本隊）でした。敷島兵営は第一大隊本部（金丸少佐）第二、第三中隊でした。自分は第三中隊（中条隊）でした。因に朝日兵舎はすべて赤煉瓦で五〇センチ厚さの壁で二重窓でできていて耐寒防暑用にできていた。

これに比して敷島兵営は前述のごとく殺風景なものです。原野の中に穴を掘った半地下兵舎です。屋根の上に防寒用暖炉「ペーチカ」の煙突が林立しているのです。厳寒零下三〇度余りでもこの建造物ならば充分生活が出来得るようでした。また夏季の猛暑も非常に涼しく生活できました。地上の建築物の厩舎ですが、軍馬は寒さに強く、訓練・演習等で荒野の中の猛吹雪でも平然と起居活動し

ていました。

佳木斯は大河黒竜江がソ連のハバロフスクで満州国側の大河松花江と合流します。松花江も興安嶺に水源を發してハルピン―方正―依蘭―佳木斯集賢鎮―柳樹河子―富錦―同江―撫遠にて合流します。佳木斯付近の水源は河幅三〇〇メートル位でした。海防艦ぐらゐの船舶は悠々と航行していました。

また江北三〇キロの地点、鶴崗（鉞山鎮）には鳥取の歩兵第六十三連隊が駐屯していました。また松花江流域は土壤豊富で、内地からの開拓団や青少年義勇軍の村落が数多くできていました。

そもそも輜重隊は建軍以来、輜重本科兵と輜重輸卒と二分され、他兵科より一段下等視されてきました。「輜重輸卒が兵隊ならば蝶々トンボも鳥のうち、電信柱に花が咲く」と揶揄されていました。輸卒は兵隊に非ず、本科兵のみが軍人だ。昭和十四年には輸卒を特務兵と呼称しました。また昭和十五年よりすべてを輜重兵と同等待遇になり

ました。輜重兵の本領を次に記します。

「輜重兵の本領」は、

「戦役の全期にわたり確實迅速に作戦の要求に応ずる輸送及び補給を実施しもつて軍の戦鬪力を維持増進しその戦捷を完からしむるに在り。輜重兵は、堅忍持久の気力を備え全軍の犠牲たるべき気魄を堅持し自ら敵の妨害を破摧しあらゆる地形及び気象を克服し昼夜至大の行軍力を發揮し其の本領を完うせざるべからず。輜重兵は常に兵器を尊重し馬の車輛を愛護し輸送品を保全すべし。」

右のごとくでしたが本科兵は初年兵でも三八式騎兵銃を背負い長靴に拍車を付け各人乗馬一頭宛でした。特務兵の武装は帯剣一本でした。そのため時の連隊長塚本松太郎大佐は輜重隊全員に槍の訓練を命じ、銃剣術以上に槍術訓練を行い第一大隊の全軍両に槍を装備しました。

自分は特業(輜重兵任務の上に特別技術、訓練、修得業務)として衛生兵を命ぜられ、以来約半年間、隣接の満州第七九一部隊(陸軍病院)へ出向

して他兵科の同期生と軍医さん・衛生下士官から教育を受けました。衛生兵操典に基づき厳格な教育でした。内容は人体の構造(骨格、筋肉、皮膚、内臓等々各器官の活動)疾病特に伝染病等々です。下手な藪医者のごとくでした。

以来一番大切な軍務携行品は赤十字印の薬納鞆でした。収容物品は鉄・ピンセット・消毒薬・包帯・三角巾・胃腸頭痛薬等々でした。

特筆すべきは兵隊さんが悪所に遊んで受けた疾病や毛虱の処置薬等の教育を受けました。教育終了して原隊復帰でした。意地悪だった古兵次兵が一変して温情を見せました。不思議なことでした。

夏季特別演習は大変でした。昼夜転倒、訓練は夕方に起床ラッパが鳴り、夜明けに消灯ラッパです。概ね一週間から十日位の単位でした。湿地通過訓練も大変でした。浅い湿地は車両に積載のまま進むが、水深が深く積載物品が水没の時はその積載物は臂力搬送です。

また、冬季特別訓練の場合も大地は鋼のごとくで、松花江のような大河も、小さな小川も、湿地帯も全部が「コチンコチン」に凍っているから行進は自由ですが、一週間位水上通過演習を行うと凍傷患者が続出で衛生兵は引っぱりダコでした。

昭和十九年四月、第十師団が総力を結集して、富錦地区（ハバロフスク）に対して防御陣地構築のため「ウリゴリ山」陣地へ出動でした。我が部隊も全力で出動し、兵営の警備要員各一個小隊が残留でした。

現場は各兵科単位で陣地構築でした。そして師団参謀部・各隊首脳陣等による作戦会議でした。

約百日かかって山の形が改まる程、縦横無尽に穴を掘りました。七月初めだった。大本営発電「忠霊塔に日の丸立つ」、そして司令部から富錦陣地の各部隊へ「本店へ帰れ」の秘密電が飛んだのです。

各部隊は一目散に佳木斯の原隊へ帰りました。第二大隊の全車輛を満杯にしての帰営でした。残余の部隊は松花江を輸送船で帰営しました。中に

は外輪船の調子が悪く、柳樹河子や集賀辺から陸路引き上げた部隊もあったとか聞きました。

第一装用軍服（夏服支給）での出陣でした。前年に部隊長の異動があり塚本大佐は暁部隊へ行かれました。後任部隊長は九州佐賀鍋島の殿様の御一門で家老職だったとかの鍋島英比古大佐でした。非常に厳格な武人で将校団は戦々恐々だったこの事です。出陣に際しては将校団に厳しい言葉で叱咤激励された由でした。

佳木斯駅にて列車に乗り込み、ハルピン―新京―奉天から新義州で鴨緑江を渡り、朝鮮を一路釜山まで一目散でした。

直ちに集船し、門司港にて船団待ちで二日位船倉へ入っていました。（防諜のため甲板に出る事が禁止されていた）。大船団を編成して玄界灘あたりでようやく甲板上に出ることが許されました。

以後台湾の基隆に上陸するまで対潜警戒で昼夜交代で勤務に就きました。八月一日基隆上陸、連隊

は各中隊・小隊単位で台湾全島に配備されました。第三中隊は台中の南二〇キロの彰化街の楠小学校に駐留しました。標高三〇〇メートルの八掛山に陣地構築を行い、山上の平坦地にサツマ芋を植えました。二・三町歩の広い畑でした。

十月十二、十三日に空襲警報が発令され（台湾沖海空戦）〇〇飛行場へ第二大隊の車輛で中隊全員が移動し飛行場の警備につきました。

自分は軍医と同一行動でした。肉体労働はなく、のんびりと日を送っていました。これは衛生兵の特権だったかも知れません。

昭和十九年十二月初旬、「第十四方面軍司令官山下奉文大将の隷下に第十師団入るべし」との大本営よりの発令があり、岡本保之師団長は幕僚を帯同して即マニラに出発しました。

本隊は輸送船「有馬山丸（二万二、〇〇〇トン）」が先発となり、歩兵第三十九連隊の第二、第三大隊が軍旗奉持して乗船、第五十四部隊は自動車第五中隊と本部修理班が乗船しました。乗った船は

快速船で十二月十二日にはマニラ入港、即全員上陸しました。

続いて「大威丸」、「江の島丸」、「乾瑞丸」の三船が高雄港を出港しルソン島に向かいました。

「乾瑞丸」には我が輜重第十連隊が乗船し鍋島大佐が指揮官となりました。自分は鍋島連隊長の怒号を最後まで聞きました。他の二隻は無事、我が「乾瑞丸」だけは機関不良にてマニラ入港前夜から僚船に遅れ、警備艇や海防艦も半ば我が「乾瑞丸」を見捨てたのかと思ったのは自分の僻みか、目的地の北サンフェルナンド港を目前にして「右舷魚雷発見！ 航跡見ゆ！」で万事休すでした。四隻の輸送船のうち三隻は無事だったのに、我が乗船だけが敵の魚雷の餌食になるとは、不運な一隻に乗った自分達が災難だったのだとその時は思いました。

満州出發時は中添中隊長以下二百五十人だったのですが「乾瑞丸」の轟沈にて百余名が水漬く屍となり散華されました。生き残った者全員は丸裸

でした。衣服、武器等の支給を受け一日と生気を取り戻しました。北サンフェルナンドの竹藪で第三中隊は再建されました。

中添中隊長が健在で、他の兵団から補充要員が来て、員数不足ながら徒歩小隊と輓馬小隊を再編成しました。車両も軍馬も無しの輓馬中隊です。以後は体力・臂力による搬送に全力を傾注するのみでした。自分は第一大隊付軍医の佐治敏治中尉に付いて行動しました。

マニラ平野北部の要衝サンホセに第十師団司令部、岡本保之中将以下幕僚並に各連隊幹部が集合、土屋参謀長以下各参謀にて作戦会議が開かれ「第五四五四部隊第二大隊はマニラ・北サンフェルナンド及びアバリ方面の資材をミヌリに急送せよ。第一大隊はバレテ峠の北方に布陣して本来の任務に邁進せよ」となりました。

国道三号線を延々と長蛇の隊列で行進しました。ロザリオーサンホセ(五号国道)―ミヌリーブアレ峠大和谷でした。

昭和二十年一月五日頃でした。その後半月程たった時、新任の相沢光治郎中佐の部隊長、同時に第一大隊長に秋山博大尉が着任されました。第三中隊はマンガヤンに布陣しました。佐治軍医から第三中隊へ帰れと言われマンガヤンへ行きました。そして懐かしい戦友に迎えられました。

第二大隊(自動車)は妙高山の第一線陣地に布陣して大打撃を受けました。大隊長はじめ多くの勇士が玉碎戦法だったとか。マンガヤンも対岸アリタオに兵站基地や陸軍病院があつて兵馬の往来はげしく、山下將軍のいるバギオへの裏街道の山下道がここアリタオから通じている。自動車隊も輸送力が弱く(ガソリン不足で代用燃料で走行だった)、パオンボン、バンバン等からバレテ峠天王山への輸送には第三中隊から一個分隊が協力して任務を遂行していました。

また撃兵団が守備しているパレテ峠の西のサラクサク峠にも輓馬車両にて弾薬・食糧を輸送しま

した。一夜のうちに四〇キロから六〇キロ位を歩
くのです。しかも凸凹の悪路です。朝、日の出と
同時に敵機が飛来します。全員が一生涯懸命でした。

マンガヤン陣地は一番東が第三中隊、小さな屋
根を挟んで第二大隊本部でそれから西に第四中
隊・第五中隊・第六中隊と配列し、自動車は半地
下壕に格納していました。その西側に撃兵団の戦
車が三両程いましたが敵機（ロッキード戦爆機）
に発見され機関砲の波状連続攻撃により大火災を
起こして壊滅しました。

五号国道からの進入路にキャタピラの跡をハッ
キリ残したのが致命傷でした。自動車隊は「竹ボ
ーキ」で轍痕を消していました。第三中隊の中央
に緑の大樹が一本ありました。この下に現地の馬
（ロバ）を三頭飼育していたら敵機飛来後数分し
てから落下傘爆弾を投下されたのが炸裂して死亡
しました。

六月三日だと思う「自動車隊が全員移動したぞ

ー」と知らされ、第三中隊もドバックスからビノ
ン峠を越えてカシブに移動しました。

直ちに糧秣収集に全力を傾注しました。弾薬、
食料その他も一切補給無しです。以後自力のみが
頼りです。次なる命令でビナガンバへ転進です。
自動車隊が先陣で進み、相沢部隊長が本部を従え
て進めました。一週間程前に連絡将校と第一中
隊長西本中尉が一個分隊を引き連れて先発、偵察
誘導、状況報告を待たずに本隊の出発でした。こ
れが後々まで不遇を強いる原因となったのです。

因に偵察隊は六日で目的地の隣の村のピナリパ
ットに到着しました。本隊は三週間経過してピナ
パガンに付いたのですが、これは完全な死の行進
でした。自動車隊の戦友が懐旧談で語るのには、
新任の中佐が先頭車両に乗り、運転手の背後から
「前進、前進」と命令し、障害物に突き当たる毎
に右側へ、右方向へと進路を取らせた。左方によ
れば五号国道に近づく危険性（敵の進路に合致）
があり、悪く申せば臆病風だったと思う。食糧も

無く傷夷し、病魔の戦友が次から次へと倒れていったのです。この世の地獄だったそうです。

自分は八月中旬にビナガバンに辿り着きました。体力の回復を待ち武器の手入れを行い、次なる命令行動の準備万全を期していました。

昭和二十年八月二十日、米軍観測機が飛来して一片の紙切れを投下して去りました。

『皇軍兵士ニ告グ！ 待望ノ平和再ビ来レリ。日本帝国ガ天皇陛下ノ命ニ依リ遂ニ連合国ト講話スルニ至ツタ事情ヲ吾々ハコノ一紙ヲ以テ諸君ニ通知ス。君達ノ気付ケル如ク吾ガ軍ノ射撃ハスデニ中止サレタ。君達ハ各自ノ本部ニ集合シ将校ノ指導ニ従エ。一同ガ秩序正シク吾ガ線ニ来得ル様ソノ方法ガ講ジラレツツアル』

本部よりの告知で……万事休す。

九月〇日

尚武作命、甲、第二〇〇三号

尚武集団命令 八月二十九日一、七〇〇大和

一、大命ニ依リ予ハ即時、戦闘行動ヲ停止セントス

昭和二十年八月二十五日〇〇〇〇ヲ以テ第十四方面軍ニ付スル作戦任務ヲ解除セラル。二、略 三、略 四、略

尚武集団長 山下 奉文

九月二十日陣地を捨て、半ば放心状態で、米軍の武装解除を受けました。その時偶々マラリアで発熱していたのが幸いして、マニラに護送されて、第一号の復員船に乗る事ができたのです。

老兵と病弱者がこの船にいっぱい乗っていました。あまり言葉も交わさず寂しそうな眼差しで見えておりました。引揚船は大竹港に入り身体検査終了後二日目に国鉄の交通切符を受け取って帰郷しました。

後記談。近頃物忘れが多く、明日の事より昨日の事、一昨日の事などすぐ失念しますが、六十年前の戦争の事は昨日の行事のごとく明瞭に思い出

されます。ただ日時が不明確で前後を取り違える
事が多いです。

最後に申し上げたい事は二度と戦争の無い平和
の時代が永く続くように、そして戦死された皆様
様の御冥福を祈ります。

愛馬と別れて

南方戦線へ

兵庫県 山下 功

私は、兵庫県和田山町の農家の長男として生ま
れました。当時、私の家族は、両親、弟妹四人の
六人家族でした。父は農業で七反歩の耕作をして
いました。

私は糸井村寺内尋常高等小学校を卒業した後、
両親の手伝いをしていました。そして徴兵検査に
は第一乙種に合格しましたが、現役の入隊ではな
くて、昭和十五（一九四〇）年二月に教育召集が
来まして姫路の第五四五部隊に入隊しました。

ここで初年兵教育を六カ月間受けた後、教育召
集解除になり、一旦家に帰りました。そこで、結
婚し、灘の酒造会社に勤務しておりました。

その年の十一月であったと思いますが、再度赤
紙が届きました。正式の召集令状で、再び姫路の